

ICTを活用した臨地実習を補完する在宅看護基礎教育 —制限下における実習コンテンツとその構成の工夫—

坂本年生*¹ 山形真由美*¹

要 約

2020年度、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大の影響により臨地実習が困難となった。そのため、模擬患者に訪問看護を提供するシミュレーション実習を主体とした学内実習プログラムを組み立て、2021年度はオンライン実習への展開を進め、在宅看護学の学習環境を整備、実施した。今回、その経験を通して、臨地実習を補完する Information and Communication Technology (ICT) を活用した看護基礎教育における実習コンテンツとその構成の工夫について検討した結果を報告する。ICT を活用した在宅看護学実習では、地域で療養生活を送る人々とその家族の生活を支える看護について理解するために、よりリアルに生活を感じ取ることが重要である。実習コンテンツ作成に際し工夫に必要な要素は、訪問看護ステーションを利用している療養者とその家族の状況のみならず、訪問看護ステーションと関係する利用者や教育機関との関係性、また撮影・配信技術、機材や人材と時間である。プログラム構成の工夫に必要な要素は、幹となる看護過程の展開に加え、地域の視点と在宅看護技術、丁寧な実践の振り返りの仕組み、グループダイナミクスを活用した学びの共有が考えられた。今後も在宅看護学実習を取り巻く環境の変化、特に臨地実習が制限される状況においては、効果的な実習コンテンツの作成とその学びをより増幅させるプログラム構成の工夫により、臨地実習を補完する学習環境を整備していくことが必要である。

1. 緒言

我が国は人口減少社会かつ人生100年時代の超高齢社会を迎え、介護施設や高齢者住宅を含めた在宅医療等を必要とする方々は、2025年には約30万人前後と推計されている¹⁾。急性期治療を終えた慢性期・回復期患者の受け皿として、終末期ケアも含む生活の質を重視した医療としての在宅医療のニーズは増々高まっている。そこで看護職には、医学に基づく治療に加えて、生活環境全般における問題発生要因の構造を見定めた上で、生活を総合的に支援することが求められている²⁾。看護基礎教育においては、「在宅看護論」の講義、演習、臨地実習を通じた学習の統合を図ることで、生活の質を重視し総合的に支援できる看護職の育成を担っている。

特に近年の若い世代は、住環境の変化や科学技術の進歩等により、人間関係の希薄化や生活体験の不

足があり³⁾、生活者の立場を推察することが難しい。そのため、今般の第5次カリキュラム改正においては、生活の場を広く捉え「在宅看護論」が「地域・在宅看護論」に名称変更された。そして、臨地実習には、地域に暮らす人々の理解とそこで行われる看護について学ぶことを強化すること、地域における多様な場での実習や多職種連携に関する実習が促進されるよう取り組むことが明記された³⁾。つまり、近年の看護学生の体験不足を踏まえた、多様な体験を組み込んだ臨地実習の構成が求められていると言える。

本学では、4年次生前期に訪問看護ステーション6日間及び総合病院の退院支援部署と福祉用具体験に各1日を組み込んだ臨地実習の構成で、多様な場を組み込んだ在宅看護学実習を行っている。しかしながら、2020年春の新型コロナウイルス感染症拡大の

*1 山陽学園大学 看護学部 看護学科

(連絡先) 坂本年生 〒703-8501 岡山市中区平井1-14-1 山陽学園大学

E-mail: toshio_sakamoto@sguc.ac.jp

影響（以下、COVID-19禍）により、本学においても在宅看護学実習における訪問看護ステーションをはじめとする臨地での実習受け入れが困難な状況になった。文部科学省⁴⁾からは、新型コロナウイルス感染症への対応のため、医療関係職種等の各学校において実習施設等の代替が困難である場合、臨地実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないという通知が出された。この通知を受け、本学でも模擬患者に訪問看護を提供するシミュレーション演習を主体とした学内実習プログラムを組み立て、在宅看護学の学習環境を整え、実施した。

学内実習プログラムに関する研究を概観すると、老年看護学領域において、記村ら⁵⁾が擬似体験を保証する学習環境の調整により、学びが連続的で重層的になるための仕組みとしての「仕掛け」を施したプログラムデザインについて報告している。在宅看護学領域においては、桶河ら⁶⁾の訪問看護の場面を撮影した動画をオンライン実習に活用した報告があるものの、制限下での実習プログラム自体のデザイン、手立てとその工夫に関する報告はない。

そこで本研究では、COVID-19禍で実践した在宅看護学領域における学内実習プログラムの振り返りを通して、Information and Communication Technology (ICT) を活用した臨地実習を補完する実習コンテンツとその構成について検討することを目的とした。これにより、制限下においても、看護学生が多様な場面を設定した看護を疑似体験し、生活の質を重視した看護を修得する実習プログラム具現化への示唆が得られると考える。

2. 方法

2.1 対象

2020年度4年次前期看護学生65名及び2021年度4年次前期看護学生73名、計138名に実施した在宅看護学実習プログラム。

2.2 検討方法

在宅看護学実習プログラムによる教育実践の振り返りを通して、制限下における実習コンテンツとその構成の工夫について検討を行った。その検討の手順は、①実習内容の明確化：2020年度実習コンテンツのねらいと構成・2020年度をふまえた2021年度の新たな実習コンテンツの修正ポイント及びねらいと構成、②実践した実習内容の考察：実習コンテンツ作成に必要な要素・実習プログラム作成に必要な要素、③まとめと課題である。検討に際しては、研究者及び共同研究者、在宅看護学実習に関わった実習担当教員で、繰り返しディスカッションを行った。

3. 結果

3.1 在宅看護学実習の目的と目標

本学で設定した在宅看護学実習の実習目的は、“地域で療養生活を送る人々とその家族を対象に、健康の維持増進とQOL向上を目指し、地域にある社会資源と連携しながら、継続的に生活を支える看護について理解すること”である。実習目標は、“療養生活を送る人々とその家族について理解できる”、“療養者とその家族の望む生活に基づく看護過程が展開できる”、“在宅療養を支える訪問看護について理解できる”、“地域包括ケアシステムにおける看護職の役割について理解できる”の4つである。目標にはそれぞれさらに小項目を設定している。

3.2 2020年度の学内実習コンテンツとその構成（COVID-19禍実習1年目）

2020年度は緊急事態宣言が発令された経緯もあり、すべての学生の在宅看護学実習を学内で行うことになった。そのため、制限下の学内実習コンテンツについて、3つの柱を立てて構成した。2020年度の実習コンテンツとその構成を図1内の上段に示す。

3.2.1 第一の柱とした実習コンテンツ

第一の柱とした実習コンテンツは、模擬患者に訪問看護を提供するシミュレーション実習とした。在宅での療養者1事例の看護過程展開を通して実習目標が達成できるよう、実際に臨床で遭遇する状況や状態を教材とし、臨床推論やアセスメントの強化を目指し実施した⁷⁾。

最初のセッションは、1グループ10数名から構成される学生らが、同じ1事例を受け持ち、訪問看護師に同行するシミュレーション場面を見学体験するというものである。なお、このシミュレーション場面は後に動画教材としても活用できるよう撮影、編集した。

見学体験後、学生らと個別に時間をかけて振り返りを行った。また、学生らは事例紹介で入手した文字情報に加え、訪問で観察した情報からアセスメント、全体像の把握につなげていった。

そして、実習1週目最終日のグループディスカッションを経て、2週目のセッションで看護計画を実施するという構成にした。学生らは同じ事例を担当していても、アセスメントの際に着目する点が様々であること、また実施する計画にも多様性があることを共有し、自身の看護過程の展開について振り返った。

3.2.2 第二の柱とした実習コンテンツ

第二の柱とした実習コンテンツは、多職種スタッフが事例の自宅に集まり担当者会議を行うというシミュレーション実習である。学生らは自ら実践した

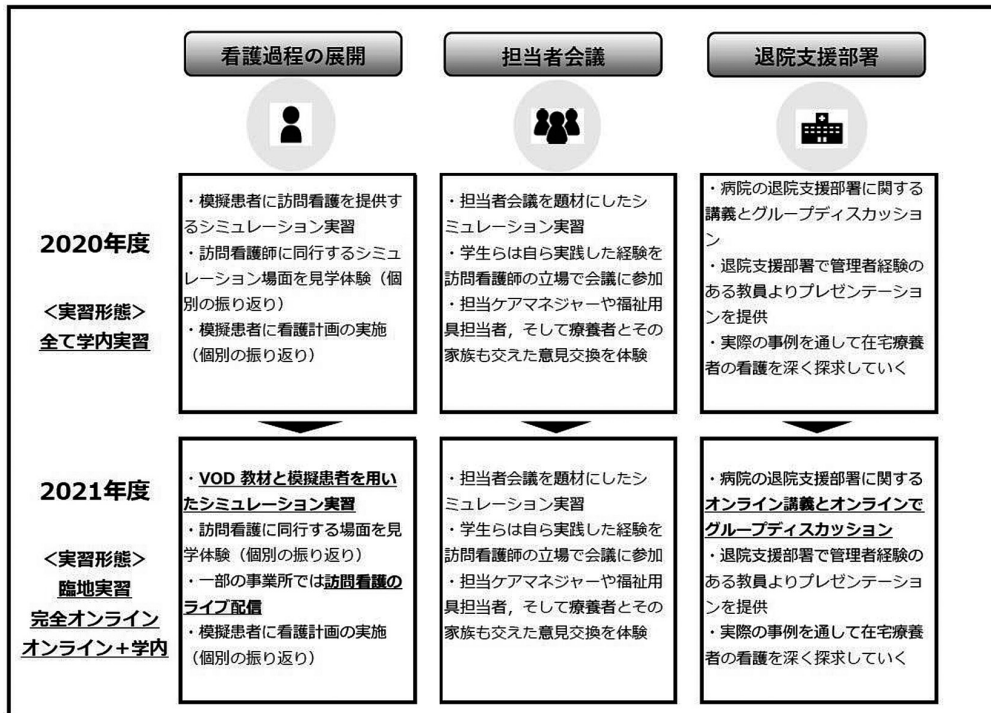


図1 各年度の実習コンテンツとその構成（柱となる3つのコンテンツ）

経験を訪問看護師の立場で会議に参加することにより、担当ケアマネジャーや福祉用具担当者、そして療養者とその家族も交えた意見交換を体験した。

3.2.3 第三の柱とした実習コンテンツ

第三の柱とした実習コンテンツは、病院の退院支援部署に関する講義とグループディスカッションである。病院の退院支援部署で管理者経験のある教員よりプレゼンテーションを提供し、実際の事例を通して在宅療養者の看護を深く探求していくセッションとした。

これら3つの柱となるコンテンツの合間に、実際の物品や教材モデルを活用し在宅看護技術の体験が行えるよう環境を整備した。その看護技術は、①コミュニケーション、②ベッド上での手浴、③胃ろう周囲の洗浄、④ケリーパッドの作り方、そして、⑤吸引排痰ケアの5つで、並行して動画教材を作成した。

3.3 2021年度の実習コンテンツとその構成 (COVID-19禍実習2年目)

2021年度は臨地の実習先である訪問看護ステーションの状況によって、療養者宅への訪問実習が可能な臨地実習の場合と療養者宅への訪問実習が不可にて学内実習となる場合が生じた。2021年度の実習コンテンツとその構成を前掲図1内の下段に示す。

3.3.1 ICT を活用した臨地実習

2020年度的全グループ学内実習とは違い、実習先

訪問看護ステーションの実習指導者との連携により、Zoom ミーティングでカンファレンスを行うことができた。また、訪問看護師のタブレットと事業所をつなぐ実習環境が、訪問看護ステーション側の意向もあり一部実現した。

3.3.2 臨地実習および学内実習からオンライン実習への移行

2021年度は、緊急事態宣言の発令により前年度同様に実習開始後の途中から臨地での実習受け入れが困難となった。さらに、感染拡大状況を鑑みた大学側の入構制限の影響からオンライン実習に移行せざるを得ない状況になった。そのため、前年度に経験した学内実習をベースにして、新たに実習コンテンツとその構成を、オンライン実習用に作り直した。

作り直しに際して、2020年度の学内実習と2021年度の療養者宅への訪問実習が可能になった実習を比較すると、実際の療養環境を体験できないということが課題の一つと考えられた。オンライン実習においては、画像で訪問場面を視聴するため、よりリアル感が失われることが懸念された。そこで、ひとりの在宅療養者の方の協力を得て、訪問場面を作成した。撮影の際は定点カメラの設置と同行する学生の視点を意識した。撮影のシナリオについては、よりリアルな場面を撮影するため大筋のみ共有しただけで、ほとんどが訪問看護師と療養者の自然なやり取りだった。

施の結果だけでなく、療養者役の人間の反応から自らのコミュニケーションや姿勢を振り返ることにもつながる。

模擬患者を活用する参加型のシミュレーション教育に関しては一定の効果が示されており、相撲ら⁸⁾はプロの劇団員に模擬患者役を依頼し実習コンテンツを作成した報告を行っている。本学の場合、今回は模擬患者を筆者が演じ、また共著者が訪問看護師を演じた。教員が模擬患者となることについては、後で指導につながる反応を返せる点に利点があると考えられるが、プロの劇団員が設定に忠実に演技すること以上に、学生らがリアルな感覚を得るには限界がある。

4.2 制限下での実習コンテンツ作成の工夫に必要な要素

実習コンテンツ作成の工夫に必要な要素は、第一にリアルな場면을導き出すため協力が得られる療養者とその家族の存在であろう。今回、2020年度に撮影・編集した教材をオンデマンドで活用した。療養者とその家族の協力が得られない場合は、演技力のある模擬患者とその家族ということになると考える。

そして、よりリアルな体験を目指すのであれば、“訪問看護ステーション協同型”以上のコンテンツはあり得ない。実際に訪問看護ステーションの看護師が契約されている療養者宅に訪問する場면을撮影、配信するという、まさに現実の臨地実習先同様の状況であるためである。本学においては、2021年度に一部の学生のみ、訪問看護ステーション側の意向もあり実現した実習環境だった。ライブ配信最大のメリットは双方向のやり取りが可能のため状況によっては看護計画の実施が可能である点と、現場の臨場感が伝わりやすい点であることと考えられる。

しかし、柴崎ら⁹⁾は訪問看護のライブ配信は臨地実習同様に代替可能な最も強力な実習コンテンツである一方で、療養者の負担が大きいことや倫理的配慮、配信のアクシデントなどデメリットも大きいと報告している。今回一部の訪問看護ステーションでライブ配信での同行訪問実施では、臨地実習先の訪問看護ステーション側の多大な配慮によりアクシデントはなかった。今後、グループ全員に提供する実習コンテンツとして準備していくには、教育機関側も事前に整えるべき事柄が多くあり課題である。

第二に必要な要素は、臨地実習先と療養者との関係性、また臨地実習先と教育機関との関係性である。遠隔オンライン訪問看護同行実習を実現した川俣¹⁰⁾の報告では、「訪問看護ステーション」と「利用者」の信頼関係があったこと、また同様に「訪問看護ステーション」と「教育機関」に信頼関係があっ

たことにより実現に至ったとあった。いかに関係者が目的を共有でき、信頼関係が成立しているかが重要な要素である。

第三にコンテンツ作成に必要な人材と機材、時間である。大学での教育研究活動のなか、限られた状況でどういったものを作り上げるかは様々な点で限界が存在する。

以上のことから、訪問看護ステーションを利用している療養者とその家族の状況のみならず、訪問看護ステーションと関係する利用者や教育機関との関係性、また撮影・配信技術、機材や人材と時間がコンテンツ作成に必要な要素であると考えられる。

4.3 制限下での実習プログラム構成の工夫に必要な要素

実習プログラム構成の工夫に必要な要素は、第一に幹となる看護過程の展開である。これは実習目標の大きな一つであり、それまで培った知識と技術を現場で統合するための主要な構成要素であるといえる。

第二に地域の側の視点、看護技術の演習といった幹を支える要素となるものである。療養者とその家族を多職種、多機関で支え、また継続的に展開されている支援を理解する上で重要な位置づけとなる。

第三に学生らの学習効果を向上させる手立てとして疑似体験後の細かな学生へのフィードバックなど、丁寧な実践の振り返りの仕組みが重要である。可能な限り療養者の立場からフィードバックすること、場合によっては療養者の家族からフィードバックすること、そして臨地実習同様に同行看護師の立場から学生らにフィードバックすることで学生が自身を知り、また客観的に見つめ直すことにつながる。

第四に、グループダイナミクスを活用した学びの共有である。他者の意見を聴くこと、あらためて自らの実践を振り返ることにより学びが深まるものと考えられる。

今回、2021年度のオンライン実習においてグループ間で個人が発表を行い、質疑応答や意見交換を行ったが、違和感はなく進めることが可能だった。他の領域ではあるもののオンライン実習の試みの報告で中村ら¹¹⁾は、オンラインによる影響が少なかったものとして中間日と最終日に行っている発表会が挙げられていた。実習期間中、グループ間の討議を重ねることで個人の経験を何倍にも増幅させることにつながっていくものと考えられる。したがって、学びを増幅させるプログラム構成に必要な要素としては、幹となる看護過程の展開に加え、地域の視点と在宅看護技術、丁寧な実践の振り返りの仕組み、グループダイナミクスを活用した学びの共有が考え

られる。

4.4 まとめと今後の課題

今回の経験を通して、ICTを活用した実習は達成を目指す目標だけでなく状況に応じてコンテンツ内容とその組み合わせ、構成を考慮する必要があることがあらためて認識するに至った。したがって、制限下においては実習コンテンツ作成とそのプログラム構成の工夫により、臨地実習を補完する学習環境を整備していくことが必要である。一方で、本研究で検討した実習コンテンツやプログラムについての学生の反応や評価は検証できていない。今後は学生からのフィードバックを踏まえて、学習環境を整備していくことも課題である。

5. 結論

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大の中でシミュレーション教育を主体にした2020年度の学内実習コンテンツの作成、オンライン教材の展開

へ進めた2021年度の実習環境整備と実施の経過を振り返った。

制限下において実習コンテンツ作成の工夫に必要な要素は、訪問看護ステーションを利用している療養者とその家族の状況のみならず、訪問看護ステーションと関係する利用者や教育機関との関係性、また撮影・配信技術、機材や人材と時間であると考えられた。次に、プログラム構成の工夫に必要な要素は、幹となる看護過程の展開に加え、地域の視点と在宅看護技術、丁寧な実践の振り返りの仕組み、グループダイナミクスを活用した学びの共有が考えられた。

今後も在宅看護学実習を取り巻く環境の変化、特に臨地実習が制限される状況においては、効果的な実習コンテンツの作成とその学びをより増幅させるプログラム構成の工夫により、臨地実習を補完する学習環境を整備していくことが必要である。そして、その教育の効果について継続して評価していくことが課題である。

倫理的配慮

本研究は、山陽学園大学研究倫理審査委員会の承認（2021U014）を受けて実施した。在宅看護学実習を行った138名の学生、臨地実習における在宅療養者とその家族、臨地実習先に関する訪問看護ステーション及び関係機関の実習担当者及び事業所について、具体的な記述をせず、個人が特定されないよう配慮した。動画を用いたコンテンツに関して、模擬療養者役の方に個人情報の保護・中断の自由・不利益の回避、結果の公表について、文書と口頭で説明を行い、同意を得た。また、ライブ配信コンテンツの実習環境を提供していただいた訪問看護ステーションからも公表に関して事業所情報の保護・中断の自由・不利益の回避について、文書と口頭で説明を行い、同意を得た。

謝 辞

在宅看護学実習に際し、多大なご支援を賜りました実習施設の臨床指導者および看護師の方々、在宅療養者の方々とそのご家族に深謝いたします。

なお、本稿の要旨は第22回日本医療情報学会看護学術大会で口頭発表した。

文 献

- 1) 厚生労働省：地域医療構想・医療計画について。 <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/0000131927.pdf>, 2016. (2022.2.24確認)
- 2) 公益社団法人日本看護協会：2025年に向けた看護の挑戦 看護の将来ビジョン—いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護—。 <https://www.nurse.or.jp/home/about/vision/pdf/vision-4C.pdf>, 2015. (2021.11.4確認)
- 3) 厚生労働省：看護基礎教育検討会報告書。 <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>, 2019. (2021.11.4確認)
- 4) 文部科学省：新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について。 https://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf, 2021. (2021.8.10確認)
- 5) 記村聡子, 梅垣弘子, 廣瀬忍：新型コロナウイルス感染症流行下における老年看護学実習の検討—「治療を必要とする高齢者への看護」を学ぶ学内代替実習プログラム—。四條畷学園大学看護ジャーナル, 4, 31-38, 2020.
- 6) 桶河華代, 大内由梨, 尾ノ井美由紀：訪問看護の場を撮影した動画を用いて。看護展望, 46, 132-134, 2021.
- 7) 阿部幸恵, 藤野ユリ子：看護基礎教育におけるシミュレーション教育の導入。日本看護協会出版会, 東京, 2018.
- 8) 相撲佐希子, 春田佳代, 諏訪美栄子, 東山新太郎, 森下智美, 中村美奈子, 村山友加里, 石井成郎, 澤野弘明：劇団員模擬患者を活用したリアリティある実習への挑戦。看護教育, 62, 56-61, 2021.
- 9) 柴崎美紀, 日野徳子, 岸知輝, 中島恵美子, 黒沢勝彦, 佐藤友紀：訪問看護ステーションとつくりあげるICTを

活用した在宅看護学実習. 看護教育, 61, 994-1003, 2020.

- 10) 川俣沙織：利用者さん，教育機関との信頼関係で実現した現場をつなぐオンライン実習. 看護教育, 61, 1014-1025, 2020.
- 11) 中村喜美子，井上佳代，大西和子：成人看護学（慢性期）オンライン実習の試み. 看護教育, 62, 50-55, 2021.

(2022年5月11日受理)

Basic Home Care Nursing Education Complementing Clinical Practice Using Information and Communication Technology (ICT): Practical Training Content and Its Organization under Restricted Conditions

Toshio SAKAMOTO and Mayumi YAMAGATA

(Accepted May 11, 2022)

Key words : covid-19, basic nursing education, simulation-based education, ICT, home care nursing

Abstract

In 2020 and 2021, practical training in home care nursing was difficult due to the spread of the new coronavirus infection (COVID-19). Therefore, we implemented an ICT-based simulation practice and an online practice. In this paper, we report the results of our study on the content and structure of the practical training. A necessary element for the creation of practical training content was a good relationship between the parties involved and the educational institution. Filming and distribution techniques, equipment, human resources and time were also necessary. A necessary element for the program structure was the development of the nursing process. In addition, it was also important to have a community perspective, home care nursing skills and a system of careful practice reflection. The use of group dynamics was also considered key. In the future, as the environment surrounding home care nursing changes, especially in situations where practical training is restricted, it is necessary to develop learning environments that utilize ICT and complement practical training. In doing so, it is important to create content that enhances the learning effects of practical training and devise a program structure that amplifies student learning.

Correspondence to : Toshio SAKAMOTO

Department of Nursing

Faculty of Nursing

Sanyo Gakuen University and College

1-14-1 Hirai, Nakaku, Okayama, 703-8501, Japan

E-mail : toshio_sakamoto@sguc.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.32, No.1, 2022 257 – 263)